フランス中部の都市を巡って

2025年6月後半にフランス中部の三都市、ブールジュ、リモージュ、ポワティエを回った。いずれも日本の観光客があまり訪れる所ではないが、中世寺院を中心とする世界遺産が多くあり、見ごたえのある地方である。朝にパリに着き、ブールジュに向かう前にまず最後に泊まるホテルの予約をしておく。前年秋に夜パリに到着し、ホテルがなかなか見つからず、深夜のパリをさ迷い歩き危うく「ホテル難民」になりかけ、やっと深夜2時過ぎに見つかるという痛い経験をし、パリのホテル事情の厳しさを痛感したので今度は用心のため、パリ東南部のターミナル、リヨン駅の近くで手ごろな宿を予約しておいたのである。

セーヌ川の対岸にあるアウステルリッツ駅（パリの6つのターミナルの一つ）からブールジュに向かう。フランスはさすが農業大国だけあって、郊外に出ると田園、牧場、森林が続き目を休ませてくれる。収穫期を迎えた茶色がかった麦畑が広がり、牧場では牛や羊がおいしそうに草を食んでいる。本当にフランスの国土の豊かさを感じる。やがてブールジュに2時間ほどで到着し駅前のホテルで投宿。人口6～7万の小さな町だがそれに似付かわないほど壮大なゴシック様式のブールジュ大聖堂があり、内部は見事なステンドグラスで飾られ、たっぷりと外光を取り込んでいる。ちょうど結婚式をやっていたが、こんな所での式は一生の記憶に残るだろう。この町では無料の市内バスが走っている。当然税金が投入されているだろうが、人の移動により経済活動が活発化し税収も増えるから公共交通は無料でもいいという考え方からだろう。

ブールジュからリモージュへ。ブールジュの倍ぐらいの都市で、ここの駅は高い塔がそびえる大きな建物で駅舎自体が観光名所にもなっている。この町にもブールジュ大聖堂に劣らぬゴシック建築、サンテチエンヌ大聖堂がありここもステンドグラスが見事である。この日はフランスには珍しいほどの暑い日で、涼みがてらに大聖堂横の市立博物館に入ると、「あまりに暑いので入場料はタダ」となんとも粋な対応だった。

リモージュは磁器生産が有名で、国立磁器博物館があり中国や朝鮮、日本の陶磁器も含め世界の陶磁器が展示されている。磁器先進地中国の模倣から出発しやがて独自の焼き物を生み出していく努力を重ねていったことがわかる。ちなみに印象派の画家ルノワールはリモージュ出身で若いころリモージュ焼の絵付け職人をしていたことが彼の絵画の色彩の美しさにつながったと言える。

リモージュは寺院、陶磁器だけでも十分見ごたえがあるのだが、第２次大戦に関する二つの見逃がせない所がある。一つは大聖堂近くにあるレジスタンス博物館、ナチスドイツの占領に対し、フランス各地でレジスタンスが戦われフランス解放に大きな役割を果たした。それを記念する博物館は各地にあるが、この地域のレジスタンスを記録し顕彰する施設である。フランスにとってレジスタンスは「誇るべき歴史」であるから当然として、一方でフランスの行った植民地の負の歴史を展示する施設はどれだけあるのか疑問が残る。

もう一つリモージュ郊外にあるオラドゥール＝シュル＝グラヌ村はナチスによって破滅させられ、皆殺しに遭った現場の惨状をそのまま残して展示していることで有名な所だ。1944 年 6 月 10 日レジスタンス活動に悩まされたナチス親衛隊が村民全体をレジスタンス協力者とみなし、一部脱出できた人を除く 638 人を虐殺し、焼き払った跡が残されている。焼け焦げた車や農機具、そして中心街路沿いのカフェ、理髪店など庶民の生活のそのものが破壊されつくされた跡が生々しい。

そして無残に破壊された教会では女性、子供たちが集められ焼き殺された。村の墓地には 1944.6．10 の日付が刻まれた墓石が立ち並び、慰霊塔もそびえている。今、この地には国内外から多くの人々が訪れおぞましい殺戮の跡で感慨に浸っているようだが、同時に日本軍の三光作戦や今のガザの惨状を思い起こさざるを得ない。

リモージュからポアティエへ。中部の戦略上重要な位置にあるポアティエは歴史上大きな戦いの舞台となってきた。732 年にトゥール＝ポアティエ間でフランク王国とイベリア半島を席巻しさらに北上するイスラム勢力ウマイヤ朝との戦いが繰り広げられた。フランク王国の勝利となったが逆の結果であればヨーロッパの歴史がその後どうなっていたかはわからない。

丘の上に広がるポアティエではロマネスク建築の二つの教会を見たかったのだが、両方とも修復中で見学できなかったのが残念だった。それでも 4 世紀のフランス最古のサン・ジャン礼拝堂

やゴシックの壮大な大聖堂が見られ、また中世の町の雰囲気をたっぷり味わえたのでまあ満足できた。

最後にパリに戻る。今度はモンパルナス駅、セーヌ左岸の大きなターミナル駅でパリには珍しい高層建築モンパルナスタワーがエッフェル塔と並んでランドマークとなっている。モンパルナスとリヨン駅を結ぶバスは満員で冷房のない車内は蒸し風呂のようでようやく予約していたホテルに到着。この数日の猛烈な暑さで熱中症気味でぐったりし早速昼寝。夜はスーパーで食料を買い込み部屋食で済ます。熱っぽい体によく冷えたスイカがありがたかった。

翌日はだるさが残るままモンマルトルまで出かけ、ふうふう言いながら坂と階段の町を中腹のダリ美術館へ。小さな美術館だが人々の常識を揺さぶるようなダリ特有の作品群が面白かった。モンマルトルは諸外国からの観光客が押し寄せ、観光公害と言えるくらいの大混雑だった。ホテルで休養後、夕方に歩いてバスチーユ広場に向かう。当初の計画ではオペラ・バスチーユでシニア用格安チケットを求め、オペラ鑑賞予定だったがこの体調ではとても無理と判断し、せめてフランス最後の夕食をバスチーユ広場周辺で食べようと思い向かったのだが、どうも様子が変で警察が車両規制をしたりしている。広場に近づくとにぎやかな音楽と人々の声が聞こえてくる。広場まで来ると数えきれない人々が道路いっぱいに本場の「フランスデモ」を行っている。パレスチナの旗も見えたのでパレスチナ連帯デモかと一瞬思ったのだが、どうもそうではないらしい。様々な派手な服装の老若男女が実に楽しそうにパレードをしている。

どうやらこの日は国際レインボーデーに毎年行われる LGBTQ の祭典だそうで、ルーブルからバスチーユ広場を通り、東部ナシオン広場までの行進らしい。道路いっぱいのパレードが数時間続くのだから参加者は数十万人に上るということだ。その人数の多さと、パレードの人々の多彩な衣装、何よりもそのパワーに圧倒された。全くの偶

然に遭遇した光景が今も目に焼き付いている。

予想外の暑さに苦しめられたけれど、見るべきものを見、予期していないことまで遭遇できたことでいい旅にはなったと思う。　　（土代　武）